

実習指導における効果的な授業展開の一考察

佐藤 沙織

Consideration of effective class development in training guidance

Saori SATO

要旨：本研究は、本学学生が介護福祉実習Ⅱ段階で明らかとなった自己の課題について、介護福祉実習Ⅲの課題達成に向けて継続的な学習を展開できる実習指導のあり方について考察したものである。

限られた実習期間で、学生自身がそれぞれに抱えた疑問を追及し、考えを深める機会が少ない現状から、話し合いたい内容についてアンケートを行い、①排泄介助時の手袋使用について、②尿意のある方への排泄介助について、③介護福祉士と看護師の業務範囲、の3つのテーマについて全体討議を試みた。

その結果、学生たちは様々な意見を聞くことによって、介護福祉士としてのあり方について、再度考えを深めることができたと振り返っている。全体討議の実施から、学生の疑問を引き出すことによって、自主的な思考力を養い、解決に向けた学習方法に導くための効果的な授業展開の必要性が示唆された。

キーワード：介護福祉士養成教育、実習指導

Summary : This research considered the method that was able to be studied continuously about the problem that the student becomes clear at care and welfare practice Ⅱ stage aiming at care and welfare Ⅲ stage.

The student pursues the doubt in the limited practice, and the chance to deepen the idea is few. Therefore, it questioned, and a whole discussion was tried about the following three points.①About gloves used for the excretion care, ②About the excretion support to the desire, ③About the care worker and nurse ranges of the business.

As a result, students were able to deepen the idea by hearing various opinions about the ideal way as the care worker. Student's doubt was able to be drawn out by executing a whole discussion, and, an independent thought is supported. The necessity of the class development for an effective study method and the solution was suggested.

Key Words : care and welfare education, training guidance

I はじめに

介護福祉実習は、介護を学ぶ学生にとって、理論と実際を結ぶという点において非常に重要な意味を持つ。学生は福祉施設において実際に利用者や職員とのかかわりの中から、介護福祉士としての基本的態度や介護技術などを学び、その展開によって生じる様々な疑問と向き合いながら成長していく。

その介護福祉実習を円滑で効果的に学習するために、介護福祉士養成課程において、実習指導が重要な役割を果たしている。

実習において学生は、実習到達目標に加え、施設、居宅サービス利用者の個別のニーズ把握、それに伴って求められる質の高い介護と、限られた実習期間の中では、学生が個々に抱えた疑問を追及し、考えを深める機会が少ないのが現状である。

そこで、介護福祉実習Ⅱ段階終了後にアンケートを行い、学生が日頃どのような疑問を持ち、実習に臨んでいるのかを調査した。その結果から、今後実習場面、あるいは介護福祉士として遭遇するであろうテーマについて、全体討議を試みた。

本研究は実習指導において自らの考えを深め、

介護福祉学科 助手

本研究は第10回日本介護福祉教育学会において発表したものに加筆したものである。

介護の多様性や視野の広がりを実感し、実習を効果的に実施するためにどのような授業展開が必要か、その一方策として実施した、全体討議の有効性について考察したので報告する。

II 研究方法

1. 対象：本学介護福祉学科2年次56名
(男性13名、女性43名)
2. 時期：介護福祉実習Ⅲ段階開始直前の実習指導Ⅱの講義時間90分×2コマ
3. 方法：
 - 1) 介護福祉実習Ⅱ段階終了後、実習グループごとに課題にそってまとめをし、実習報告会を行う。
 - 2) 十分話し合いができなかった実習中の疑問点や、分からなかった点、全体で討議したい点について、理由も含め3題まで記述してもらう。
 - 3) 2)の結果を整理し①排泄介助時のゴム手袋の使用について、②尿意のある方への排泄介助について、③介護福祉士と看護師の業務範囲についての3題をテーマとして選択する。
 - 4) テーマをもとに全体討議を行う。一題につき60分程度とし、討議の進行は講義担当教員が行い、フリートークの形式をとる。
 - 5) 全体討議後、意見・感想を記述してもらう。
 - 6) 記述された内容を分類し、考察する。

III 結果および考察

全体討議終了後の自由記述から、記述された内容を1内容1件とし、類似する内容ごとに分類し、討議の状況を交えながら考察した。

回答者数：講義出席者49名(男性9名、女性40名)、回収率：100%

1. 本学の実習指導計画

1) 授業内容

- ①講義時期：2年次通年、②時間数：60時間
- ③教育目標：a. 介護福祉実習Ⅱ・Ⅲの意義・目的を理解し、必要な知識および具体的な方法を学ぶ。
b. 演習を通し、個別介護の問題解決における思考過程を学ぶ。
- ④教育内容：<実習前> a. 介護福祉実習

Ⅱ・Ⅲの目的、目標、内容、b. 実習記録、c. 実習の準備(実習場所の決定、施設オリエンテーション、実習の心得) d. 演習<実習後> a. 実習のまとめ(目標・内容・反省・今後の課題、介護福祉実習Ⅲ終了後ケースレポートのまとめ) b. 自己の課題に対するレポート(自己の課題に対する努力と達成度、実習担当教員との面接)

表1 討議に全体に関する意見・感想

分類	人数
1. 視野の広がりの実感	19名
2. これまで聞くことがなかったクラスメイトの意見への共感	12名
3. 自己の振り返り	5名
4. 考えの深まりの実感	4名
5. 今後の取り組み・自らの姿勢	3名
6. 自己との対面	3名
7. 自信へのつながり	2名
8. 全体討議開催の意義	2名
9. 全体討議の進め方に対する要望	2名

2. 全体討議を通しての学び

1) 討議全体に対する意見・感想(表1)

全体討議に参加したことにより多くの学生は視野が広がったと記述している。討議で交わされた意見も、その行為が良いか、悪いかという短絡的な意見に止まらず、各々の体験、学習から意見を出し合うことにより、介護の基本、利用者の心情の理解、科学的根拠に基づいた判断等が必要などの意見が聞かれた。

また同意見を持つ学生同士でも、その視点や捉え方は様々であり、考え方の多様さを実感すると共に、また自らとは反対の意見を持つものにも耳を傾け、一つの事象や行為を多角的に捉えることの重要性を見出している。

さらに学生の多くがこれまで聞くことのなかったクラスメイトの意見を聞くことができ、有意義な時間だったと述べている。

学生生活において、講義や実習で沸いた疑問や悩みについて日常的に話し合う機会は少ないように思われる。この全体討議を通し、介護を学ぶ仲間が、自らと同じ疑問や悩みを持って日々取り組んでいることを知り、安心、共感を得るとともに、自己の意見と比較することによって、新たな考え方の構築や、実習場面において疑問解決のために

実践したいという研究心が芽生えている。

しかし中には全体では積極的に発言できなかったこと、また発言者が特定の学生に偏ってしまうことなどから、小グループでの討議や、教員がより多くの学生への指名を希望する学生もみられた。討議を意義あるものにするために、アドバイザーとしての教員の役割は大きいといえる。いかにして学生の課題や疑問を抽出し、解決方法、学習方法に導いていくかが課題といえる。

2. 討議されたテーマについての意見・感想

(表2-1、2-2、2-3)

表2-1を見てみると、施設職員の態度について討議したいと考えている学生が最も多かった。介護福祉専門職としての基本的態度は、その他のどのテーマとも共通しており、今回、全体討議を行うにあたっては、介護福祉実習Ⅱで残された課題達成と、最終段階である介護福祉実習Ⅲに向けて、考えを深める機会として、学生の意欲が継続できるテーマがふさわしいと考えた。

したがって実習報告会において時間的制約のため議論が打ち切られてしまったテーマ、また多様

な考えを引き出すことができ、より多くの学生が参加できるテーマとして、先にⅡ3)で述べた3題を選択した。

テーマはそれぞれ場面の状況が異なるものの、学生らは別々に存在した課題として捉えることはせず、共通して根拠や意味を明確にする必要があると捉えている。介護福祉士として取り組むべき課題は、援助する側の時間的区分の中に存在するのではなく、利用者の生活を全体として捉えていくことが必要であり、生活という連続性を念頭に考慮していくことへの気づきがみられた。

より身近で具体的なテーマを示すことで、改めて知識不足や利用者・家族への配慮の必要性を痛感し、一側面からのみの考え方を改めている。

さらに実習場面において、根拠を確認したか、流されるままに援助していなかったか、利用者の特性を把握していたかなど、自己反省を含め介護福祉実習Ⅲの主体的かつ具体的実習展開の方向性を定めている。

また介護福祉士と看護師の業務範囲についての討議をきっかけに、自らの介護観、介護福祉士と

表2-1 ディスカッションテーマについて

項 目	人数
1. 施設職員の態度について	21名
2. 男女同室について	5名
3. 手袋の使用について	5名
4. 意志疎通が困難な方とのコミュニケーション	5名
5. 介護福祉士と看護師の業務範囲	5名
6. プライバシーの保護について	4名
7. 施設でのレクリエーションのあり方	4名
8. 同性介護について	4名
9. 過剰介護について	3名
10. 尿意のある方への排泄介助について (尿意があるのにおむつにして下さいと話していた。)	1名
11. その他	13名

表2-3 自らの介護観について

分 類	人数
1. 介護という仕事に対する誇り	8名
2. 難しさと奥深さの実感	6名
3. 介護福祉士という仕事の魅力	4名
4. 介護福祉士としてあるべき姿	3名
5. 今後も大切にしていきたいこと	2名
6. 介護職としての使命感	2名
7. 不安・迷い	2名
8. 今後への希望	1名

表2-2 討議したテーマについての意見・感想

分 類	人数
排泄介助時の手袋の使用について	
1. 知識の必要性	5名
2. 介護福祉士としてのケアのあり方	3名
3. 視野の拡大	3名
4. 考え方の多様性、柔軟性	3名
5. 利用者の視点による判断	3名
6. 手袋使用の賛否	2名
7. 利用者の全体像の把握の必要性	1名
尿意のある方への援助について	
1. 知識の必要性	3名
2. 具体的援助の方法	3名
3. 利用者の視点、心情の理解	2名
4. 専門職としての対応	2名
5. 利用者の全体像把握の必要性	1名
介護福祉士と看護師の業務範囲について	
1. 比較する必要はない	3名
2. 現場における協力・連携の必要性	2名
3. 互いの職種に対する理解	1名

いう仕事に対する想いに触れながら、意見を記述している学生が多く見られた。

業務範囲については他職種の役割や、業務内容、連携場面を紹介しあいながら、職種間に線引きをするのではなく、介護は何を目指すのか、介護の主体者は誰か、といった介護の本質的部分に触れながら討議が進められていった。

討議の中では、他職種との比較や周囲の評価に、介護という道を選んだことへの迷いや不安を抱えている学生が多くいることが明らかとなった。しかしまた、介護という仕事に対する誇り、難しさと同時に、奥深さを実感し、介護福祉士の魅力について語っている。学生たちは介護を学ぶきっかけ、介護を学ぶにあたっての苦悩を互いにうち明け、共感を得ると同時に、介護福祉士としての誇り・自信を取り戻すことができたことと述べている。

しかし一方で、介護福祉士としての仕事はこうあるべき、こうありたいと願いながら、自らが社会人として現場に出たとき、同じように考えていけるか不安であるとの意見も見られた。学生の疑問は多岐に渡り、介護が多様な課題を抱えていることがわかる。これらの疑問を把握し、共に考えていく場を作ることで、思考過程を構築し、介護福祉専門職としての実践力を養う機会になると考える。

3. 今後の課題についての意見・感想(表3)

今回取り上げたテーマは、実習場面においてはほんの一部分を考察するにすぎないが、学生たちはその範疇さえ熟慮していなかったと自らを振り返っている。全体討議を通し、実際のケアがどうあるべきか、今自分たちにできることは何かを、賢明に見いだそうとしている。

次段階の実習や介護福祉士としての今後について、自己の課題を明確にしようとする姿勢がうかがわれた。

表3 今後の課題について

分類	人数
1. 自己の研鑽	7名
2. これからの方向性	4名
3. 実習Ⅲ段階への意欲	3名
4. これまでの振り返りと自己に対する戒め	2名

IV まとめ

今回全体討議を実施したことにより、介護が根拠を持ってなされるべきであること、課題が分断

されたものではなく、利用者の生活全体を捉えながらよりよいケアとは何かを常に考えていく視点が必要であることを学び取っている。利用者の主体性を尊重し、実習でこそ学べることを学生に動機付けていくことが実習指導の重要な観点であり、利用者個々の理解を深めるためには、自主的に思考することが重要であり、討議や発表する場を設け、学生が考えや意見を自由に述べる必要がある。テーマに基づく全体討議は、実習においても自主的に判断し、行動できる実践力、さらに介護福祉士としての質を高めることと直結していると考えられる。

またこの試みは、2年間を通し一度だけの開催にとどまったが、この経験を通し他の様々な課題についても話し合いたいという声が多数聞かれた。今後は、スーパーバイザーとしての教員は、学生が方向性を見出せるような助言、指導ができるよう研鑽を積む必要がある。

また、全体討議が介護福祉実習Ⅲにおいて、どのように活かされたか、新たな課題は何であったかを追調査する必要があるといえる。しかし、同じ場面に立たされ判断を委ねられたとき、全体討議での経験が、活かされていくのではないかと考える。

学生のモチベーションを高め、効果的な実習展開をしてもらうための一方策として、全体討議をより充実したものにしていきたいと考える。

引用文献

- 1) 高垣節子：介護福祉教育における実習指導方法，日本介護福祉教育，8(2)，中央法規，pp73, 2003

参考文献

1. 末廣貴生子：介護福祉実習終了後の評価からの考察－介護福祉実習指導の授業展開と介護福祉実習について－，介護福祉教育，9(1)，pp61-65, 2003
2. 阿部志郎：福祉の哲学，誠信書房，2001
3. 栗村典男：援助関係の原点Ⅰ，近代文芸社，2001
4. 福祉士養成講座編集委員会編：介護福祉士養成講座Ⅺ介護概論，中央法規出版，2003